

内  
容

- 牛ウイルス性下痢・粘膜病（BVD・MD）を予防しましょう……………1
- 現在の口蹄疫の発生状況と発生防止のために……………2
- 傾向と対策～高病原性鳥インフルエンザ・昨年度の国内発生事例から学ぶ～…3
- 牛白血病対策「分離飼育（放牧）」について……………4



## 牛ウイルス性下痢・粘膜病（BVD・MD）を予防しましょう

防疫課病性鑑定担当

### 1. 牛ウイルス性下痢症・粘膜病とは…

◆ウイルス（牛ウイルス性下痢症ウイルス＝BVD ウイルス）による伝染病で、

- 感染牛の唾液・糞尿等に含まれるウイルスを経口摂取することで感染。
- 妊娠牛が感染した場合、胎子感染の可能性あり→流産・奇形・持続感染牛
- 通常は、一時的な風邪症状や下痢等を起こした後、自然に治癒する。
- 持続感染牛は、重篤な下痢を示し死亡する場合がある。（粘膜病）

### 2. 持続感染牛(PI牛)とは…

- 母牛が妊娠40～120日頃にBVDウイルスに感染すると、胎子はPI牛になる。
- PI牛は、出生後から死ぬまでウイルスを排泄し続け、農場内を汚染する。
- PI牛は重篤な下痢（粘膜病）を発症するリスクが高い。（死亡率100%）
- PI牛が妊娠すると、生まれてくる子牛は100%PI牛となる。

### 3. 発生状況は…

- 管内で、本年度（8月20日現在まで）に3戸5頭（小脳低形成1頭、粘膜病2頭、PI牛2頭）の発生が確認されています。

### 4. 治療・予防は…

- 治療法はありませんが、適切なワクチン接種により予防することができます。

### 5. ワクチン接種は…

- 初年度：育成牛には種付けの2週間以上前に生ワクチンを1回接種。  
導入牛、妊娠牛には不活化ワクチンを1ヵ月間隔で2回接種。  
（接種時期については、獣医さんと相談してください。）
- 2年目以降：不活化ワクチンを年1回補強接種。（種付けの2週間以上前であれば生ワクチンも接種可能です。獣医さんと相談してください。）

#### <注意事項>

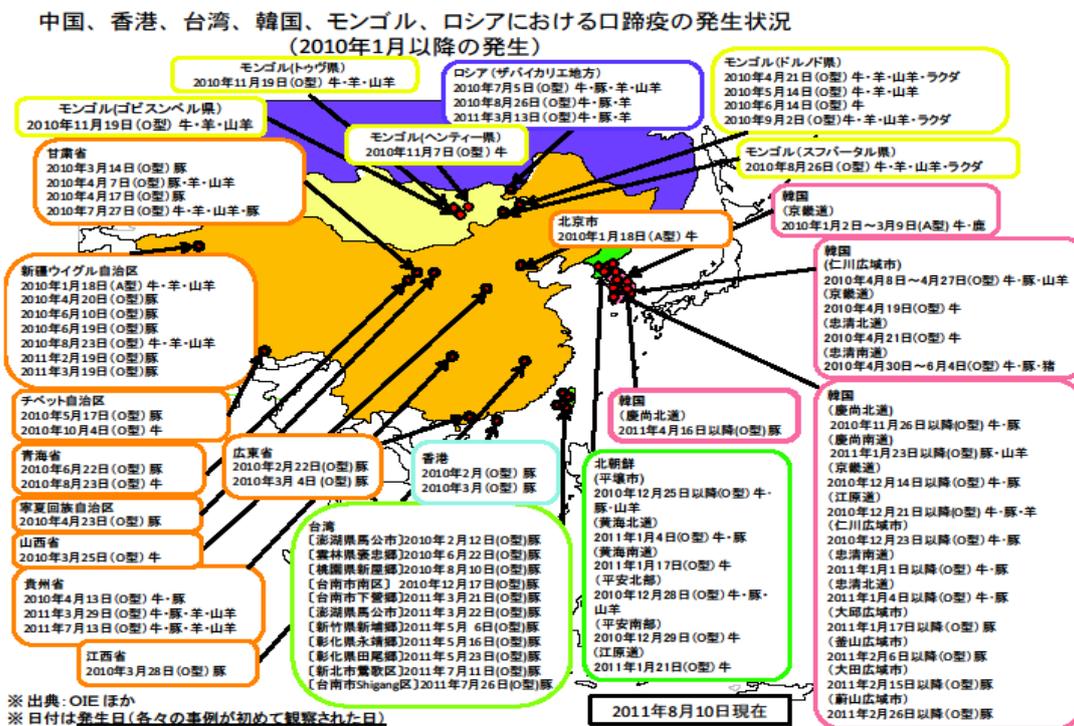
- ① PI牛は一見健康牛と見分けがつかない場合があるため、知らずに導入してしまい、農場内を汚染してしまう危険があります。自分の牛を守るためにはワクチン接種が非常に重要です。
- ② ワクチンは毎年1回接種して下さい。（2年目にはほとんど効果がなくなります。）

# 現在の口蹄疫の発生状況と発生防止のために

## 防疫課大家畜担当

平成22年4月に宮崎県で発生した口蹄疫は、終息までに約29万頭の牛・豚等の家畜が殺処分され、発生地域のみならず日本の畜産業に大きな影響を与えました。

防疫措置を実施した結果、平成23年2月には、OIEよりワクチン非接種口蹄疫清浄国としてのステータスの回復が認められました。しかし中国、台湾、韓国、ロシア等、日本の近隣地域では本年も口蹄疫が発生しており、韓国では平成22年11月の発生以来、本年7月までに牛、豚合わせて約348万頭が殺処分されており、これは韓国内の牛の5%、豚の35%が殺処分されたこととなります。



わが国では、水際防疫を強化していますが、口蹄疫の発生防止には、畜舎に入る際の消毒、外部から人や車を入れない（訪問があった場合は記録しておく）等、各畜産農家における日々の飼養衛生管理が重要です。

また、口蹄疫を広げないためには、早期発見がとて大切で。そこで、口蹄疫の症状について確認しておきましょう。宮崎県における発生事例では、39℃以上の発熱および次ページの写真のような病変が観察されました。



泡沫性流涎（よだれ）



口の中の水ぶくれ、ただれ



蹄のただれ



鼻の水ぶくれ

牛や豚がこのような症状を示したら、家畜保健衛生所までご連絡をお願いいたします！

ちょっと休憩…

## ～節電への取組みのその後～

6月に発行した、前年度対比 15%の節電を目標に様々な取組みを始めましたことを掲載し、その1つとして、グリーンカーテンを作成しましたが、その結果が右下の写真です。

隙間がたくさんありますが、夏場、快適に過ごすことができ、ゴーヤも収穫できました。

グリーンカーテンのおかげ？で目標である前年度対比 15%の節電は達成できました！



牛白血病（地方病型）は病原体（ウイルス）により感染し、発症すると全身に腫瘍ができる牛の伝染病で、岩手県発生件数は、H22は124頭（前年102頭）で増加傾向にあります。

牛白血病は、既に感染している牛が感染源となり、感染牛の血液や乳汁等が主にアブ等吸血昆虫や人の行為（注射針や直検手袋、除角器等の使い回し）、及び母乳摂取により、（牛白血病に感染していない）牛の体内に入ることによって感染します。感染した牛は病原体を生体持ち続けますが、発症する牛は感染した牛の数%と言われおり、発症しなければ多くは健康牛と変わらず一生を終える個体も少なくありません。この病気には有効な予防薬や治療法がないため、現在管内公共牧場や一部農場では対策として『分離飼育（放牧）』を実施し、新たな感染防止を図っています。

そこで、今回は牛白血病対策『分離飼育（放牧）』について紹介します。

## 1 分離飼育（放牧）って何でしょう？

分離飼育は、牛白血病に感染しているかどうか血液検査を行い、感染している牛群（感染群）と感染していない牛群（非感染群）に分けて飼育することです。血液検査は当所で行っていますので、ご相談ください。

## 2 どのような効果があるのでしょうか？

感染群と非感染群を分けて（離して）飼育することにより、アブ等によって感染牛の血液に含まれるウイルスが非感染牛に感染するリスクを低減できます。

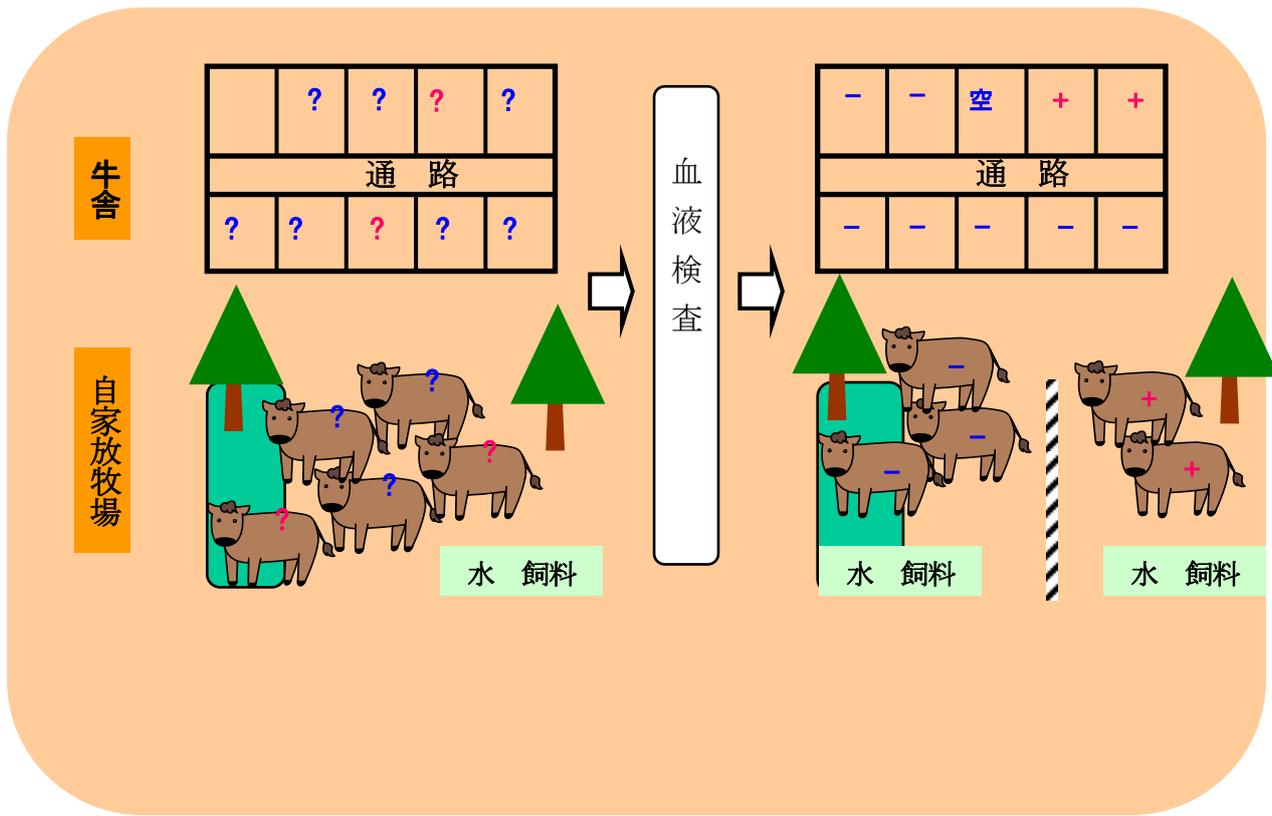
## 3 いつ行えばいいのでしょうか？

感染牛がいる間は継続して分離飼育を行うことが望ましいのですが、肉用牛の場合、搾乳がありませんので、アブ等吸血昆虫が活動する期間（5～10月の間）は分離を行うことが望ましいと考えられます。

## 4 どのように分けるのでしょうか？

分離方法は牛舎構造や飼養密度、自家放牧地の有無等によって様々です。牛舎内では感染牛と非感染牛を一方に集め、距離をとります。自家放牧場では電気牧柵等を使用し、放牧地を区画します（図1）。

次回は、牛白血病対策『子牛管理の注意点』についてお知らせします。



○ 『牛舎に余裕が無い・・・』場合は公共牧場の利用も一考。

牛舎に余裕がない、感染牛と非感染牛の比率が大きく異なる等の理由から現状では分離飼育が困難な場合もあります。しかし、分離飼育の目的のひとつは吸血昆虫による新たな感染を防ぐことです。吸血昆虫が活動する5～10月に分離飼育を実施できれば感染防止効果が期待できます。

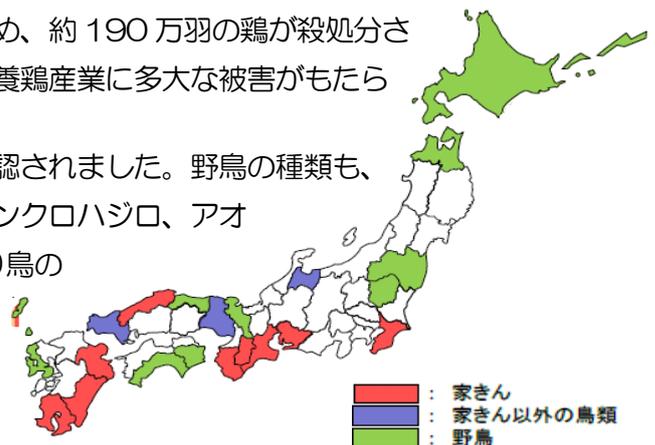
このような場合にはこの期間だけでも公共牧場の利用をお勧めします。現在、管内5公共牧場で分離放牧を実施していますので、これらを利用することで本病対策を行うことができます。

## 傾向と対策！ ～高病原性鳥インフルエンザ・昨年度の国内発生事例から学ぶ～

防疫課中小家畜担当

平成22年11月から平成23年3月にかけて、国内の24養鶏農場で高病原性鳥インフルエンザが発生しました。まん延防止のため、約190万羽の鶏が殺処分されたほか、周辺農場の鶏や卵の移動が制限され、養鶏産業に多大な被害がもたらされました。

本病は、東北地方を含む全国各地の野鳥でも確認されました。野鳥の種類も、ハヤブサ、ハクチョウ、オシドリ、ナベヅル、キンクロハジロ、アオサギ、カモメ・・・など多種にわたっています。渡り鳥の飛来期（10月）に北海道でウイルスが確認された状況も、従来と異なっていました。



発生農場の調査により、以下の事実が確認されました。

○ 人や車両による侵入のリスク

- ・農場専用の長靴へ履き替えていなかった 4例
- ・農場専用の衣服に着替えていなかった 4例
- ・鶏舎ごとの踏込消毒槽を設置し消毒を実施していなかった 3例

○ 野鳥・野生動物による侵入のリスク

- ・金網・防鳥ネットの破損など隙間が認められた 7例
- ・金網・防鳥ネットの網目の大きさが大きかった（3～5cm）7例
- ・ネズミや小動物が侵入可能な隙間や穴が鶏舎外壁に存在した 13例

○ 飲用水・飼料の汚染による侵入のリスク

- ・沢水・わき水を未消毒で飲用水に用いていた 5例

今年も、渡り鳥が飛来する10月以降、国内での本病の発生リスクが高まると考えられます。引き続き、

①人・車両

②野鳥・野生動物

③飲用水・飼料の汚染による侵入防止対策の徹底と再確認を指導していきますので、関係機関の皆様のご理解・ご協力をお願いします。



農場専用作業着着用



鶏舎ごとの長靴交換・踏込消毒



鶏舎間の草刈と石灰散布

**「ネズミの子」1匹鶏舎へ入れないことは難しくても、対策の徹底により本病の感染の機会を大きく減少させることができると考えます！！**

編集・発行

〒023-0003 岩手県奥州市水沢区佐倉河字東館41-1

岩手県南家畜保健衛生所

TEL 0197-23-3531

FAX 0197-23-3593

岩手県南家畜衛生推進協議会

TEL 0197-24-5532

FAX 0197-23-6988